

徐 勝 著

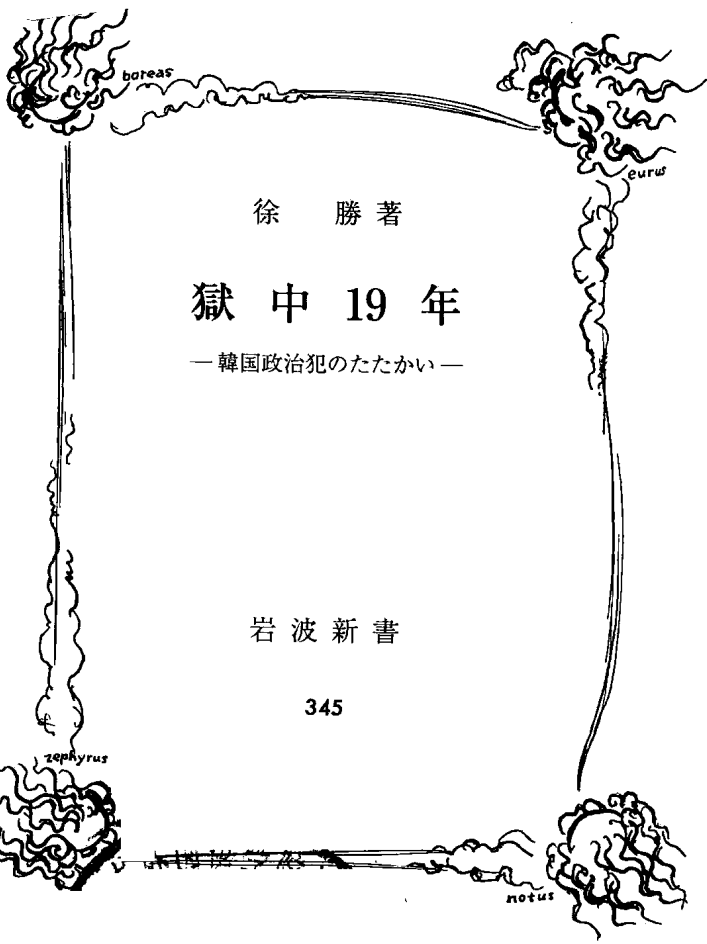
獄中19年

—韓国政治犯のたたかい—



岩波新書

345



徐 勝 著

獄 中 19 年

— 韓国政治犯のたたかい —

岩 波 新 書

345

徐 勝

1945年京都府に生まれる。68年東京教育大学を卒業後、韓国に留学。翌年ソウル大学校大学院社会学科に入学。71年、弟・徐俊植とともに逮捕。陸軍保安司令部によって「在日僑胞学生学園浸透間諜団事件」として発表される。以後90年に釈放されるまで、19年間非転向政治犯として獄中にあった。

出獄後、カルフォルニア大学バークレー校客員研究員を経て、現在、立命館大学講師。なお、関連図書に以下のものがある。

「徐兄弟 獄中からの手紙」(徐俊植編訳、岩波新書)

「長くきびしい道のり 徐兄弟・獄中の生」(徐俊植、影書房)

「朝を見ることなく 徐兄弟の母 呉己順さんの生涯」(社会思想社現代教養文庫)

「徐俊植 全獄中書簡」(西村誠訳、柏書房)

「民衆が真の勝利者 徐勝 出獄メッセージ」(影書房)

獄中19年

定価はカバーに表示してあります 岩波新書(新赤版)345

1994年7月20日 第1刷発行

1994年9月16日 第2刷発行

著者 ^ソ ^{スン}
徐 勝

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・三陽社 カバー・半七印刷 製本・永井製本

© Suh Sung 1994

ISBN4-00-430345-1

Printed in Japan

はじめに

夜明けの川辺で釣糸をたれるアボジ(父)のウキはグイッと水中に引き込まれ、竿は大きくたわんだ。竿の先で大きな銀色の鮒が鱗をきらめかせ高く跳ねた。その輝きは無数のさざ波にキラキラと照り映え、まだ明けやらぬ川面は燦然と輝いた。

一九四五年四月三日の夜明け、まんじりともせずお産を待つうちに、ふと眠りこんだアボジは私の産声で胎夢(懐妊や出産のときに父母がみる夢)から目覚めた。生涯、魚釣が唯一の道楽だったアボジらしい夢だ。沖繩に米軍が上陸し、日本が敗戦への道を転げ落ちていたそのころ、徴用を避けて逃亡生活をしていたアボジは、次男の誕生を迎えるためにコッソリと京都の田舎のわが家に舞い戻っていた。この夢には、明日をも知れない戦争のさなかで、家族と自分の運命への息づまるような不安と緊張、暗澹あんたんとした現実のなかで光を求める切迫した思いがひそんでいるようだ。

私の生まれたその年に大日本帝国は侵略戦争に敗れ、朝鮮は長い苦渋に満ちた植民地支配から解放された。しかし、その喜びもつかの間、解放された民族としての平和と繁栄への期待は米・ソ両国による国土分断で無残に踏みにじられ、植民地時代にもまさる苦難の分断時代が始まった。

在日朝鮮人のこれまでの苦痛も植民地支配と民族分断に起因している。わが民族全体がそうであったように在日朝鮮人もまた、日帝により祖国と故郷と人間の尊厳までも奪われた者たちである。皮

肉なことに朝鮮の分断がつづく一方、日本は経済大国となり、在日朝鮮人の日本での定住化が進んだ。解放後、朝鮮民族が分断されずに平和と繁栄の道をあゆんでいたなら在日朝鮮人の多くは、当然、故郷に帰っていただろう。歴史的な意味では、今もなお、この問題は清算されていない。ともあれ私の青少年時代は、在日朝鮮人が「奪われた者」として自らを強く意識した時代だった。

私の祖父母は一九二〇年代に朝鮮の貧しい農村から仕事を求めて京都に移ってきた。父母は太平洋戦争を挟んだ荒々しい時代を、ただ若さと勤勉さをもとで生きぬき、五人の子を育て家庭を築いた。保育園に入るころだったろうか、私はアボジに手を引かれ、ある小学校でおこなわれた朝鮮人の集まりにつれていかれた。薄暗い講堂の正面には青紅が噛みあいせめぎあう大きな「大極旗」(韓国国旗)がかかっていた。人々はまばらに立ちならび、うら寂しい「螢の光」のメロディーにあわせて「愛国歌」をうたった。それから映画が始まった。激しく傷ついた画面には、飛行機の銃撃をあびて逃げまどう人々、炸裂する砲弾に吹き飛ぶ田畑、燃えあがる家などが現われては消えていった。朝鮮戦争のニュースフィルムだった。私が祖国というものを意識した最初の出来事だった。

幼いころから日本社会で日本人でない自分を意識させられ、朝鮮人としての私の意識は作られた。京都市で高校まで卒業し、東京で大学にかよったが、勉強よりも朝鮮人とは何かを考え、朝鮮人らしく生きることにより大きな関心があった。「奪われた者」として、自分の正体を取り戻し、自分が帰属すべき祖国と民族を取り戻したかった。そして大学を終え、引き裂かれた民族の不幸をとりのぞき尊厳を持つ人間として生きるために、韓国に行くことを決意した。そこで、一九年間、分断の狭間に

囚われ、死と生の境をさまよい、分断の歯車に押し潰される民族の恐ろしい現場を目撃した。

一九九〇年に釈放された私が、この本を書くことを約束してから早くも四年の歳月が流れた。四年という時間は、獄中での一九年間を反芻し評価するのに充分であったとは言えない。しかし、時間の経過とともに記憶はだんだんと薄れてゆく。それにもまして、今も監獄で苦しむ同志らの姿を思い浮かべると、これ以上の躊躇や怠慢は許されなかった。

私が語ろうとすることは、過ぎ去った日の思い出ではない。長い軍部支配が終わり、文民政府が樹立された韓国では、いままも南北朝鮮を敵対関係と規定し、人権を抑圧する国家保安法が厳存している。そして信念を放棄しないという理由で、三、四〇年にもおよぶ監獄生活を強いられている年老い、病み疲れた三三人の非転向政治犯がいる。私が経験した非人間的な監獄の状況は現在進行中である。

私は出獄直後、「一九九年の獄中生活は思想転向制度とのたたかいだった」と言った。暴力と迫害、脅迫と欺瞞、人間心理の弱点をつく卑劣な術策に抗して韓国の非転向囚らは半世紀間たたかいつづけてきた。いかなる理由があるにせよ、暴力による思想転向の強制が許されてよいはずがない。だが、韓国政府は、今も反共分断体制を支える究極的な堡壘として思想転向制度を固守している。

イデオロギーの時代が終わったと言われている今日、思想や信条を守るため獄中でたたかうことにどれほどの意味があるのかという疑問がわくだろう。さらに、すべてがうつろいゆく今の世に、ひとつの思想を守りつづけるのは「船に刻んで剣を求め」の類ではないかという指摘もあるだろう。しか

し、政治犯たちが希求した民族の統一と自主、正義と平等の実現という理想が朝鮮半島ですでに実現され、その意味を失ったとは思われない。変わりゆく世界で変わらぬものの大切さを彼らは体現している。それに、暴力や強制のまえに膝を屈せず人間の尊厳をまもるたたかいは、いつの世になっても貴重なものといえよう。それゆえに、私はその人たちのたたかひの片鱗なりとも書きとどめたかった。私は獄中のつれづれに、いろいろな本を読んだ。なかでも北京の街と民衆を愛し、その生活と抵抗を生き生きと描写した中国の作家、老舎ラオシェの作品はよかった。私は監獄を憎む。しかし、そこに囚われた人たちを愛し、そのたたかひに敬意をはらっている。いつか私も老舎のように濃こまやかな筆致で、監獄の生活を描いてみたいものだと思った。だが、獄中では、紙もペンも持つことを許されず、なにも記録することができなかつたので、そこでの出来事の多くは忘却の彼方に流れさってしまった。それに加えて、紙数の制約と私の能力の不足でその望みは果たせなかつた。ただ記憶を呼びもどし、ともに苦勞をした同志たちの助けをうけ、獄中でのことを、できる限り正確に記すことにつとめた。

人名は漢字表記したが、一部、朝鮮語の音から類推したものがあり、すべてに正確を期することはできなかった。地名や難読字は煩雑を避けるために、原則として必要最小限のものにだけ初出にルビをふった。図表は舎棟配置図を参照することのできた「ソウル拘置所略図」をのぞき、私の記憶により作られた。引用された手紙、訴訟関係文書、宣言などは、本書を書くにあたり、私が見なおし新しく訳出、整理した。民族的、地理的総称には朝鮮、地域をさす呼称には韓国・北朝鮮を使った。

目
次



第2審，ソウル高等法院での著者
(1972年)

はじめに

I 保安司——獄中生活の始まり……………1

拉致／四月の朝のあの青空——焼身／陸軍首都統合病院
／ソウル拘置所・病舎二房／看守部長／公判／赤三角
——左翼死刑囚の標識／政治犯／人間の作品——再入
院・手術／ベトナム戦争の悪夢／七・四南北共同声明／
維新監獄／最終陳述と上告理由書／一〇舎下の政治犯／
目を開ける自由もなく

II 罪囚の日々——七〇年代・大邱矯正所……………67

流れに逆らう鯉のように／一舎下——政治犯特別舎棟／
通房・通謀／「おはよう」も軍靴に踏みにじられて／巨
大な「人間倉庫」／（参考消息）／所変われば飯変わる／
囚人の日々／紙・神／大きい魚が小さい魚を／監獄の中
の監獄／春夏秋冬／狂風、雷鳴、驟雨——死刑執行／緊

急措置令／断食闘争／図書検閲／監獄の孔明／獄鬼神

III 思想転向制度との闘い……………133

思想転向か？ 死か？／思想転向審査／転向工作の対象者／間諜／紙一枚のために／差別支配の構造／思想転向工作の始まり／飢餓作戦／血肉の情／白色テロ／非常な勇気をもって——俊植の暴露／赤い星——工場地下組織事件／独裁者の死、七〇年代の終末

IV オモニ——八〇年代・大邱矯導所……………181

オモニの霊前に／オモニ／人革党、南民戦／監獄の春／新しい思想転向工作／監獄に生き埋めに／アボジの死／「兄弟にもまさるわが同志」／「金日成將軍万歳！」

V 再会——八〇年代・大田重拘禁矯導所……………219

白い恐竜——大田重拘禁矯導所／閉鎖独房／水拷問／抗議自殺／クリスマスの贈物／五指山を望んで——一五舎

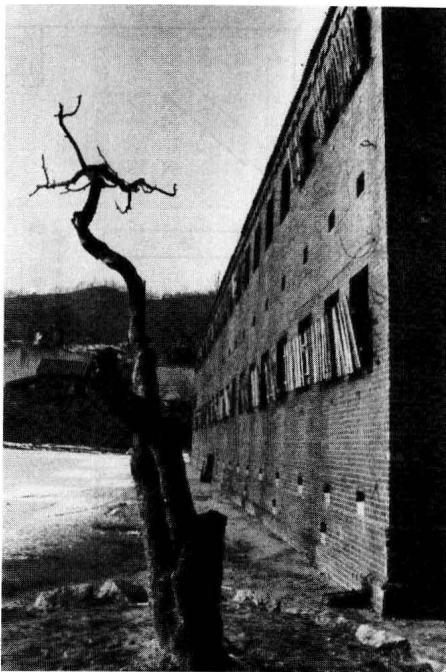
上ノ人間到处有青山ノ一点の恥じるところもなく——俊
植の釈放ノ民主化の力ノ統一への願い、自由への夢ノそ
れでもつづく転向工作ノ再会——一九九〇年二月二八日

それから……………263

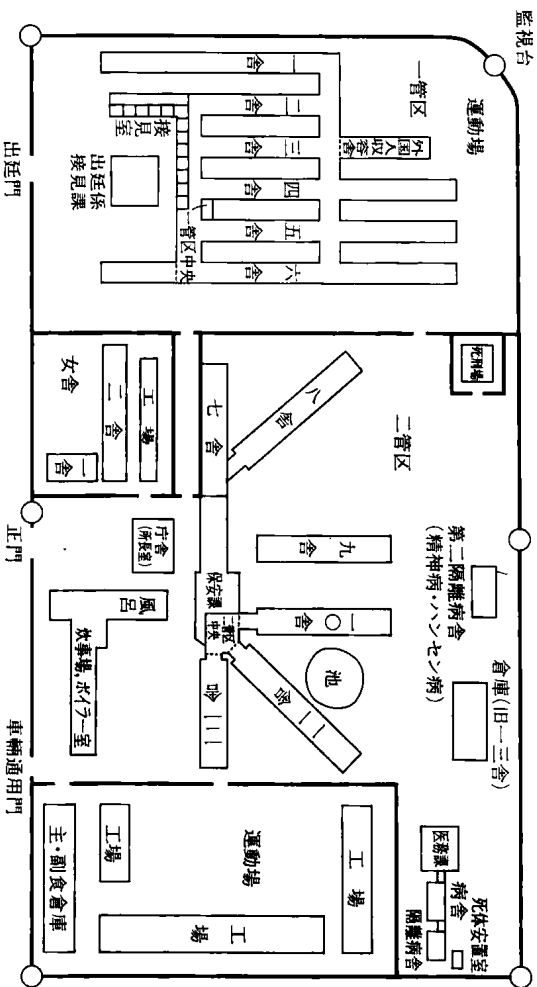
解説……………水野直樹……………267

略年譜

I 保安司——獄中生活の始まり



ソウル拘置所10舎外景(鍊鉉・関庚遠撮影『西大門刑務所』悦話堂より。著者は一階のいちばんむこう端に見える17房にいた)



ソウル拘置所略図(1972年ごろ)

拉致

玄海灘を越えると大地の色が変わる。岩山がちの花崗岩質の白い土壤にへばりつくような、矮小な樹々とワラ屋根。数千年の長い歴史を通じ、数え切れない外勢（外部勢力）の侵略を受けながら、ユーラシア大陸の端つこに懸命にしがみつくように生きてきた民族。

世界の歴史をひもとけば、数限りない人間同士の殺し合いや残忍な抑圧などがある。朝鮮人だけが特別大きな苦痛や、犠牲を強いられてきたのではないだろう。それにしても、大陸と島国とに挟まれ、河のように流した血と涙を代価に、試練に打ち勝って、誇り高く独立を守ってきた民族だ。故なく課せられた運命の苛酷さに苦しみながら、絶望の末に再生してきた民族だ。

私を呼ぶ機内放送で想念は中断された。派手なチマ、チヨゴリを着たスチュワーデスは、ただ搭乗確認だと言う。もう一〇回以上も飛行機に乗っているのに、搭乗確認は初めてだ。なぜだろう？

一九七一年三月六日、金浦空港キムポに降り立った。二年間のソウル大学校大学院修士課程を終え、京都の家で最後の冬休み（韓国の冬休みは二月末から三月はじめまで）を過ごしての帰りだった。新学期からは教養課程部の助手になるはずだった。

いつもは物欲しげに荷物を引っくり返す税関職員も、顔を見るなり「徐勝^{ソンソク}氏ですな。そのまま通つて下さい」と言う。ゲートを出てタクシー乗り場に向かったが、長い列が作られていた。柱の陰から若い男が出てきて、有無を言わず荷物を引つたくと「家まで行きましょう」と言った。一瞬、そのころ空港にはびこっていた白タクかなと思つた。「いくらで行くんだ?」「ご心配なく。安く行くよ」と、助手のような男が黒い自家用車に手早く荷物を積んでしまつた。

独立門の近くにあつた私の下宿からほんの一〇〇メートルほどのところで車は急停車した。後からつけてきたジープから、四、五人の男がバラバラと駆け寄り、一人が車のドアを開け両脇に乗り込むと、手をねじり上げ頭を抑え、黒いジャンパーをかぶせた。

「情報機関員だ」と直感した。車は一〇分余り走り、閑静な住宅街のなかにある高い塀で囲われた木造モルタル二階建ての前庭でとまつた。青瓦台^{チョンワデ}(大統領官邸)のすぐ横の「保安司^{ボアンス}」(陸軍保安司令部^{オインドン})玉仁洞^{オインドン}対共分室^{オインドン}だつた。

保安司は解放後、アメリカ軍政庁の情報課に始まり、(韓国)国軍創設(一九四八年)後、国軍情報局として発足し、陸軍本部特務隊(五〇年)、陸軍防諜隊(六〇年)、陸軍保安司令部(六二年)、国軍保安司令部(七七年)へと名を変えた。

保安司の本来の任務は、軍内部での情報収集と捜査だ。すなわち軍内部の反乱、クーデター、不正・腐敗、そして不純分子(左翼)の監視、情報、捜査だ。



ソウル市略図(1970年ごろ)

一九四五年、朝鮮の解放後、李承晩イ・スンマンは南北朝鮮の分断をさいわいに極端な反共政策を掲げ、四八年に南だけの単独政府である大韓民国を樹立した。反共は国是(国政の根本理念)であるだけではなく、政敵を倒し、独裁と永久執権を正当化する最良の武器だった。朴正熙パク・チンヒは、一九六一年に「五・一六クーデター」を起こし、権力を掌握し、同年、中央情報部(KCIA)を創設した。それ以前には、特務隊、防諜隊は最も強力な情報機関だったが、それから保安司は中央情報部、治安本部(警察)対共局とともに韓国の三大情報機関の一つとして情報恐怖政治の凶器となった。また反共を錦の御旗に対共(対共産主義)分野では軍だけでなく民間人にたいしても猛威をふるった。

八〇年の保安司令官、全斗煥チョンドフワンのクーデターの後は中央情報部を凌駕し、全能の権力をふるった。八九年、民主化の高潮のなかで保安司の民間人を対象とする査察ブラックリストが暴露され、国民の激しい批難をあげ、九一年、名称を「国軍機務司令部」と変更し、民間人査察を禁じられた。現在の金泳三キムヨンスン政権下では、その政治介入や不正・腐敗などが批判され、機構縮小の決定が下された。

ホールに引きずりこまれた私を迎えたのは、丸刈りの細身で長身の、蛇のように酷薄な目の男だった。保安司・対共処長、金教鍊キムギョリョン大領(大佐)だ。「なぜ捕えるのだ。逮捕令状を見せろ」というと、平安道の方言で「間諜かんちやう(スパイ)に令状は要らん。いつでも殺せる」と言い放ち、部下に「連れて行け」と命じた。二階で荷物の検査をし、眼鏡を奪われ、素っ裸にされ、ベルトなしの軍服に着替えさせられ、一階ホールにつづく尋問室へ連行された。